

(翻訳) ジョージ・ギッシング「俊足ヘスター」

八幡雅彦

A Japanese Translation of George Gissing's "Fleet-Footed Hester"

Masahiko YAHATA

彼女はハックニーで生まれ育った。無断で結婚した、頑強で、頭の弱い軍人の3番目の子供として。母親は、瘦せていたが、針金のようにしなやかで、内職に洗濯をしながら家族を支えていた。16歳ながらヘスターは見事な体型だった。他人が見れば、19あるいは20の立派な娘と思ったことだろう。彼女がロンドン競技場で若い男たちと競走するのを止めたのはその時だった。というのは、彼女はガス工場の工場長ジョン・レイナーと婚約したからだった。

彼女はスカートをはくことはあっても、決して足首の下まであるズボンをはこうとはしなかった。ヘスターは地元のチャンピオンのランナー以外は誰にも負けなかった。並の若い男たちは彼女に勝ち目はなかった。走ることは彼女にとって喜びであり誇りであった。短距離ですばらしい記録を打ち立てたが、長距離でも学校の「紙まき鬼ごっこ」などでは誰にも引けを取らなかった。

当然の如く、ジョン・レイナーはこれらすべてを止めさせた。彼にただならぬ興味を呼び起こしたのは、ふたりがまだお互い他人同士の時見た彼女のランニングだった。彼は問い合わせをし、彼女の両親を捜し出し、結婚を申し込み、いちおうの承諾を得た。しかし、彼女は二度と走らないという了解がなされた。レイナーは年収およそ200ポンドだった。結婚したら自分の家をもつ予定だから、文明生活の掟に従って

欲しいと彼は言った。ヘスターは快諾した。というのは、彼女は男にさほどの愛は感じなかったが、バラ色の将来の見込みが彼女の心を強く動かしたからだった。そして彼女は、週給30シリング以上の恋人は望むべくもない娘たちから羨望に満ちた賞賛的となり、有頂天の気分だった。

それに加えて、ジョン・レイナーは誇るべき男だった。もしヘスターがどこかのつまらない事務員か職人、もしくはどこかの血色の悪い小柄な男と契りを交わしていたとしたら、それは不幸だっただろう。ジョン・レイナーと彼女は実に似合いだった。頑丈で、身長は6フィートに及ぼうとし、生き生きとした顔色で、鋭い目付きで、独立心旺盛だった。知性の面では彼女よりずっと優れていたが、フランクな性格で親しみやすく、動物的情熱に満ち溢れ、無意味な学校の勉強に頭を使う気などいっさいなかった。少年の頃家を飛び出し—それは北部のどこかだったが—ただ墮落しなかったが故に立派に成人した。ジョンは「中庸」と言うものを知らなかった。彼にとって、恋愛とは凡人には想像も及ばないものだった。その狂おしいまでの愛は、まだその熱情に応えるまでには成長していないヘスターを当惑させた。

彼女はまさに「気高い蛮人」とでもいうべき本性丸出しだった。言葉遣いはハックニー訛りだったが、彼女が話す時には過度の下品さは影

を潜め、決して墮落してはいない、うぶな乙女心を実によく表していた。学校ではほとんど、いやまったくと言っていい程勉強しなかった。しかし、怠惰は初々しさによって帳消しにされていた。無意識の憤みが、彼女と近くの口軽娘たちとの間に一線を画していた。彼女は自分の体を尊び、目立って清楚だった。服装も派手でなく、そこそこに品があり、決して見せびらかすことなどしなかった。笑うにしてもまれで、ユーモアのセンスは極めて乏しいようだった。しかし彼女ほど毎日を快活に愉快に過ごしている人間はまずいなかった。彼女は農村の若者顔負けの食欲だった。たやすい勝利には無関心だったが、情熱と野望に満ちた毎日だった。彼女にとってジョン・レイナーの4ポンドの週給は自慢の種だった。というのはそれは相当の収入だと彼女には思えたからだ。彼を愛したのは、今までに知り合ったどの男よりも強くハンサムで、威厳に満ちていると思えたからだ。

婚約して半年はすべてがうまくいった。ヘスターは漬物工場に勤めていたが、レイナーは快く思わず、彼女を辞めさせるために、密かに母親に給料分の金を手渡した。かくして、それまで母親の洗濯業を手伝っていた姉が外で働くようになり、ヘスターがその代わりに務めることとなった。これは誤算だった。彼女は糊付けもアイロンがけも下手だった。しかしそれもつかの間のことで良かった。17歳でヘスターは結婚することになっていた。

破局が訪れたのはその時だった。ヘスターは、ちょっとした足自慢を鼻にかけている青年からレースを申し込まれ、誘惑に打ち勝つことができなかった。ある、日がどつぷりと沈みかけた時のこと、彼女はこっそり家を抜け出して、競走した。そして敗れた。この約束破りを聞き付けるや否や、ジョン・レイナーは怒り狂ってやって来た。もしレースに勝っていれば、ヘスターは頭を下げた許しを乞うていたかもしれない。しかし、負けた悔しさあまり、意固地になり、非難されたことに腹を立てた。ものすごい見舞で大ゲンカとなり、1週間ふたりは会わなかった。ヘスターの母親のとりなしでふたりは

寄りを戻したが、ジョンはもはや昔の彼ではなかった。疑心暗鬼で、嫉妬深くなった。間もなく彼はヘスターの家にしょっちゅう出入りしているアルバート・パチェラーという男のことを詮索し始めた。彼は、壁紙張り職人の弟子で、ヘア・オイルの匂いをプンプンさせたこの生意気な若造が嫌でたまらなかった。ヘスターは怒ってこの知り合いをかばった。「わたし、アルバート・パチェラーとは幼なじみのよ。あの人の目的は、あるとすれば、姉さんに言い寄ることだわ。ガス工場の工場長だからって、給料がいいからって、そんな傲慢な態度は止めてよ」

この言い方に、ジョンは頭にカッと血が上った。再び大ゲンカとなった。一度目に輪をかけて激しかった。ヘスターは婚約指輪を指から抜き取り、地面に叩きつけた。場所はヴィクトリア・パークだった。

「そんなもの返すわよ。とっとと消え失せてよ」彼女はあらん限りの軽蔑を込めて言った。「あんたみたいな男と二度と関わりたくないわ」

「望むところだ」怒りに満ちた答えが返って来た。「おまえのような女が俺に尽くしてくれる訳がない。いいか、俺の出したラブ・レターを全部返してくれ。それに一それに、おまえのお払い箱になったものは全部な」

「すぐにでもそうしてやるわよ。それから、その不機嫌な面を二度とわたしの家の前に見せないでちょうだい」

ジョンは踵を返して去った。彼のラブ・レターと贈り物はひどい包装状態で送り返されて来た。喜びは終わったかに見えた。

「おまえはバカだよ、本当に大バカだよ」とヘスターの母親。「またおまえは漬物工場へ舞い戻りだよ。それに姉さんもまた昔の仕事じゃないか。こんなことなら、姉さん、何も辞める必要なかったんだよ」

「ああ、今すぐにでも戻るわよ。喜んでね」ヘスターはやり返した。

しかし彼女は二度と競走しなかった。そして明らかに人が変わっていた。友人は前に付き合っていたよりも派手な娘たちにとって代わられていた。それに呼応するかのよう服装もけば

けばしくなり、金がある時にはスタンダード劇場に足しげく通うようになり、若い男たちを「とっかえひっかえ」していた。この頃、彼女の父親が亡くなった。それは、概して幸運な出来事だった。というのは彼は最近酒浸りになり、以前から家族を支えようとしたことなど一度もなかったが、さらに家族にとっては深刻な重荷になりかけていたからである。この知らせを聞いたジョン・レイナーはある日の晩方、ヘスターと彼女の家の近くの道で会った。親切に、優しく話しかけたが、娘は2、3の冷たい言葉を吐いただけで立ち去った。

1週間後、彼はハックニー・ダウンズでヘスターがアルバート・パチェラーと一緒にいるのを見かけた。かん高い声を上げて笑っており、それは以前には見たこともない姿だった。

ある日、ヘスターは夜遅くまで帰って来ず、母親は二度と繰り返すようなことがあれば折檻すると威嚇した。この脅しは娘の人生に新たな危機をもたらした。彼女は家出して、一人暮らしを始め、それからというものの家族との音信はほとんど途絶えた。

2年の間、ジョン・レイナーは愛した娘と口を聞くことはなかった。そしてその間、彼の境遇は著しく変化した。まず手初めに、怒りを爆発させ工場長を解雇された。そして雇い主から大工仕事を斡旋されたが、それは著しい墮落だった。最初、ジョンは軽蔑を込めて拒絶し、会社を完全に辞めた。しかし数日後、かくも誇り高き男には珍しいことだが、彼は卑屈になって戻って来た。そして下等な仕事を自ら受け入れた。そして再びトラブルを起こした。今度は酒が原因だった。次いで鍛冶屋職人に身を落とし、この屈辱に不平ひとつ言わずに耐えた。ある日、ジョンは仕事仲間と喧嘩になり、野獣のごとく暴れ狂った。そして彼は会社を完全に辞めるか、「山行き」かの選択を迫られた。山行きとは石炭の運搬作業のことだった。ジョンはこの屈辱を受け入れ、山へ行き、荒くれ中の荒くれに交じって働き、自分もそのような人間となった。酒を浴びるように飲み、我が身に降りかかった運命の中で光り輝いているようにさ

え見えた。誰の目にも、彼は屈強なごろつきで、言葉遣いは荒れ、振る舞いは野蛮そのものだった。仕事仲間を恐怖に陥れ、ひとこと言えば拳が飛んだ。その整った顔は頑丈な健康の色を失い、薄汚いポロを着て、住所不定の身となった。

ヘスターはこれら一部始終を知っていた。16で結婚し、20で未亡人となった彼女の昔の友人がジョン・レイナーを知っていて、時折、彼と話していた。このミセス・ヘフロンという女性がジョンの人生におけるひとつひとつの破壊への歩みをヘスターに逐一レポートしていた。

「あんたのせいよ」彼女はいつも言った。「あんたが心ある娘だったら、あの気の毒な人を助けに行くはずよ」

「わたしが。ごもつともね」

「あの人、あんたのことが好きでたまらないのよ」

「どうしてそんなことが分かるのよ」ヘスターは冷たく言った。

「だって、あの人あんたのことがいつも忘れられないって言ってるわよ」

この言葉が動かぬ証拠となった。ヘスターは考え込んだが、これ以上議論する気は起こらなかった。もっぱらアルバート・パチェラーのことばかり話した。彼は仕事で南ロンドンにいたため、滅多に会えなかった。

この年の夏、ヘスターは19になったばかりだった。彼女とミセス・ヘフロンはある日曜日の朝、ヴィクトリア・パークに出かけ、若い未亡人の2歳の子供を乗せた乳母車を代わるがわる押していた。散歩の途中、草の上で眠り込んでいる男のわきを過ぎた。ヘスターは気づかずに通り過ぎたが、ミセス・ヘフロンは突然振り返って、驚きの叫び声を上げた。

「おやまあ、レイナーさんよ」

連れは立ち止まって、振り向いた。ジョンは顔を腕の上に伏せて熟睡していた。彼はこの日の朝は見苦しくない清潔ななりだった。ほぼ1分、ヘスターは彼をじっと見つめ、それから体を動かし、立ち去った。

「あの人と結婚しなかったのは実に正解だっ

たわ」と彼女。

「全部あなたのせいよ、ヘティ」振り返って友人は答えた。

「とんでもないわ。あの人、とにかく身を持ち崩してしまったのよ。半分以下の男だわ」ヘスターはアルバート・バチェラーから3度目のプロポーズを受けたが、確たる返事はしなかった。彼女が彼をその気にさせたというのは疑いようのない事実だった。この年の秋、彼は彼女と多くの時を過ごした。彼女は彼が言うがままに任せ、絶えずほほ笑んでいたが、彼女の返答には一返答したとすればだが一特有の憤りが現れていた。ヘスターは1時間のデートの間に20以上の言葉を喋ることはまれだった。事実、彼女の生活には妙な沈黙が訪れた。普段の交際も避けるようになった。時たま怒りを爆発させることはあったが、かつての元気はすっかり影を潜めた。ランナーとしての業績を自慢することはとうにやめていた。しかし、美貌の点では衰えを知らなかった。そのしなやかな肢体は美の極みに達しているかのようであった。そしてその顔は、レースに熱中して赤みを帯びていた頃よりもますます表情豊かになり、魅力を増して来た。誰ひとりとしてヘスターの悪口を言わなかった。未だにその話し方は初々しく、誰が見ても恋煩いを知らぬ乙女だった。

9月のある日の晩方、彼女はバチェラーと下宿近くのひと気のない道を歩いていた。通りすがりの人はまれだったが、ほどなくして知人、つまり他ならぬジョン・レイナーに出会った。彼は「山」で働く時の荒くれた服装をしていた。ヘスターは彼に目を釘付けにした。彼も彼女に気づいたが、目もくれず、無視して通り過ぎた。

「あなた、わたしがこんな侮辱受けても平気なの」ジョンが通り過ぎた後、娘はきつい口調で言った。

「侮辱だって。あいつが何したっていうんだ」

「おやまあ、あの男ったらわたしをひどい侮辱の目で見たのよ。あなた気づかなかったの。あなたってデートに最適のお相手ね」

彼女の顔は火照っていた。立ったままでジョンの後ろ姿を指さしていた。

「しかもこれが初めてじゃないのよ」彼女は息もつかせぬ早口で付け加えた。「このままあの男を行かせてしまうんだったら、わたし、あなたとは二度と口を聞かないわよ」

ミスター・バチェラーは、それなりの体力を備え、時としては喧嘩相手に刃向かうことができたが、必ずしも闘争的な男ではなかった。当の出来事は彼を困惑させた。というのは、彼はレイナーからの侮辱というのはヘスターの勝手な思い込みか、勝手に作り出したことだと疑ったからである。たぶん彼女はジョンが昔の罰を受けるのを見たいのだろう。一瞬、彼はためらった。

「臆病者」娘はひどく軽蔑した顔つきで言った。

バチェラーは我慢できなかった。

「おい」彼は怒鳴って、その時20ヤード先にいたレイナーの後を追った。「おい、おまえ、ちょっと止まるんだ、この野郎」

相手は驚いて振り向いた。

「おめえ、俺に口聞いてんのか」

「そうだとも。おまえ、この若い女性を軽蔑するとは一体どういうつもりなんだ。彼女はおまえから軽蔑の目で見られたと言ってるんだ。しかも初めてじゃないとな。ちょっとおまえこちらへ来て謝れ」

ジョンは当惑して話し手を、それから2、3歩近寄って来たヘスターを見た。

「俺がこの女を侮辱しただと」

「この女とは何事だ。おい、もう一度言ってみろ。おまえの鼻をへし曲げて……」

「それ以上言やがってみろ」ジョンはどう猛に言った。「へし曲がる鼻も無くしてやるぞ。バカ野郎か」

彼は背を向けた。しかしそれと同時に横顔を鋭い一撃を受けた。

「それがおめえのやり方なんだな」ジョンは再び、やや前かがみになってじっと睨んでいるヘスターの方をちらりと見やって言った。

彼は上着を脱ぎ捨てた。それから1分も経たないうちに、アルバート・バチェラーは歩道に大の字になってのびていた。戦いの見物人の口

から短い嘲り笑いが聞こえてきた。彼女の騎士は再び立ち上がり、今度はさほどぶざまではなく、拳を振りかざして見事な戦いぶりを見せた。レイナーの頬は血を吹いた。致命的一撃を加えることはできなかったが、ジョンの方がずっと優勢だった。パシッ、パシッと彼の強打が響いた。とうとう彼は相手の歯をへし折り、ひざまづかせた。

「思い知ったか、このバカ野郎」と彼。

3、4人の見物客が集まってきた。さらにやじ馬が駆け寄ってきた。最寄りの家の窓が開け放たれた。女性の声が聞こえた。街灯の光りをいっぱいに浴びたヘスターの顔はどう猛な喜びの表情だった。

「わたしがあなただったら絶対降参しないわよ」彼女は嘲りの口調でパチェラーに向かって叫んだ。

彼は実際降参できなかった。やじ馬の群れがそれを不可能にした。もう一度戦いが行われた。多分、2分かそこらだっただろう。その間にパチェラーはひどい一撃を見舞い、軒下の階段までよろめいて行き、そこでなすすべ無く倒れ込んだ。

「二度と妙な真似すんじゃねえぞ、若造」それが、上着を取り群衆の間をそそくさと立ち去ったジョンの別れ際の忠告だった。

同時にヘスターは、浮き浮きした喜びの目で逆方向に去って行った。アルバート・パチェラーは二度と彼女との交際を求めなかった。

家に着くと、ヘスターはランプを灯した。それはみすばらしい、屋根裏窓付きの小さな寝室だった。帽子と上着を脱ぎ、ゆっくりとベッドに横たわった。1時間かそこら横たわったままで、何を見てもなく、笑いながら、まるで独り言を呟いているかのように口を動かしていた。11時に彼女は起き上がり、帽子をかぶってもう一度家を出た。そして戦いが行われた場所まで歩いて行った。あたりは静まり返り、陰鬱だった。警官が近寄って来て、彼女は話しかけた。

「すみません、ここからベック・ストリートの角まで距離はどのくらいか教えていただけま

せん」彼女は指さした。

「正確には言えないが、恐らく500ヤードくらいだろう」

「走ってかえって来ますから、タイムを計ってくれませんか」

警官は笑ってジョークを言ったが、結局タイムを計ることに同意した。ヘスターは右足に重心を置いて「用意」の姿勢をし、ドンと勢いよく飛び出した。暗闇を駆け抜け、再び飛んで返って来た。

「4分02秒」と警官。「悪くないな、娘さん」

「悪くないですって。それだけなの。もっと速く走れる女の子がいたら教えてちょうだい」

そう言って彼女は上機嫌で走り去った。

数日後、彼女が漬物工場がひけて出て来た時、ミセス・ヘフロンがあるニュースを知らせにやって来た。ジョン・レイナーはガス工場を辞め、さらにはイギリスを去る決意をした、南アフリカに行く予定で、1週間後には出て行くかもしれないということだった。

「それがわたしにどうだっていうの」ヘスターはぶっきらぼうに言った。

「わたしがあなただったら、あんな人を外国に行かせたりはしないわよ。クロウさんとこの御主人、南アフリカに行ったまま、今日まで音沙汰無しなのよ」

「あんな人、地獄へ落ちてしまえばいいのよ」ヘスターはいつもにないきつい言葉遣いで答えた。そう言ったまま、友人を無視して歩き去った。

彼女たちはまもなく再会した。ミセス・ヘフロンの子供が重病にかかった。母親は2日2晩看病し、疲れ切って、ヘスターの助けを求めた。娘は役に立った。ミセス・ヘフロンが、大家が自由に使うことを許可してくれた部屋で眠っている間、夜半まで起きて看病に当たることを約束した。

「わたし、今日レイナーさんから手紙を受け取ったの」未亡人は、ふたりが子供のベッドのわきに座っている時、疲れ切った声で言った。

「まあ」

「彼は明日経つよ。ウォータールー駅を朝1番の汽車で」

「恐らく、それが一番だわ」

ミス・ヘフロンはしわくちゃんになった手紙をポケットから取り出し、じっと見つめた。「なんてこと言うの」彼女は悲しげに怒鳴った。「ヘティ、わたしがあなただったら彼を絶対行かせないわよ」

ヘスターは、痩せた、疲労で青ざめた顔をちらりと見やった。何も言わなかった。当惑して目を落とした。

7時だった。ヘスターは、1時間だけ家に帰って、それからまた戻って来て、母親が寝ている間子供を看病するからと告げた。しかし、実際には、彼女は家に帰る代わりに最寄りの駅のハックニー・ダウンズまで行って、その予約切符売り場で駅員に尋ねた。

「ウォータールー駅を朝1番に出る汽車の時刻を教えてくださいませんか」

「本線ですか」

「南アフリカに行きたいんです」

駅員は笑った。

「サザンプトン行きですな。それともプリマス行きですか。5時50分、6時10分前ですな」

この情報を得て、彼女はミス・ヘフロンの下宿にとりあえず戻った。ヘスターが2時まで起きていて、それから母親が交代するという取り決めがなされた。ミス・ヘフロンは、時間が来てもし友人が自分を起こす必要が生じた時のために暖炉の上に時計を置いた。そして8時、ヘスターは小さな病人のために時折何をしてやればよいのか十分把握したしたうえで、腰を下ろした。

真夜中まで子供はベッドの上で呻き、寝返りを打ち続けた。一服の薬を与えると鎮痛作用が現れた。12時半にはすべてがおさまっていた。ヘスターにとって時間が経つのは遅かった。というのは彼女の心は小さな患者の体と同じくらい熱く火照っていたからである。1時の鐘が鳴った。あと1時間……。

知らぬ間の出来事だった。完全な目覚めの状

態から、なんの前触れもなしに、熟睡状態に陥ってしまった。彼女を起こしたのは、まるで彼女の良心を咎めるような子供の声だった。時計のところに駆け寄って行くと、非常に安心したことにまだ2時半過ぎだった。ミス・ヘフロンはきっとまだ眠っているんだわ、かわいそうに。他の時だったら眠ったままにさせておいただろう。しかし彼女は今や一刻も早く出かけたかった。2時半から5時50分まで十分時間はある。しかし、今出かけねばならなかった。

母親を起こし、時間を教えた。しばらく話をし、それから晩もう一度覗くからという約束をしてヘスターは家を出て行った。

暗く冷たい朝だった。幸い雨は降っていないかった。ヘスターは下宿まで走って帰り、玄関の鍵を開けて中に入り、自分の寝室までそと上がって行き、急いで着替えをした。一番いいものばかりを身にまとった。冬用に買ったばかりの上等な黒色麦藁帽子、彼女の肢体のしなやかさを見せる暖かいジャケット、首には毛皮の襟巻き、流行の飾りの安物のイミテーション。それから彼女はそと下宿を出た。きっと3時頃だろう。

心は千々に乱れ、深く考え込みながら、シティー・ロードとオールド・ストリートの交差点まで速足で歩いて行った。ここで彼女は警官に話しかけ、ウォータールー駅まではどの道を行けばいいのかを尋ねた。答えは、バンクまでまっすぐ行き、それから西へ曲がってストランドに出るのが一番いいということだった。

「分かりました。今何時か教えてくださいませんか。」

「5時25分になったばかりだよ」

彼女は、まるで警官に殴られたかのようによろめいた。5時25分だって。それじゃあ、ミス・ヘフロンの時計は止まっていたんだわ。彼女は身に降りかかった不幸を、惨めな悟りを開いて見た。

「でも」彼女は喘ぎながら言った。「わたし、6時10分までにウォータールー駅に着かなくちゃならないんです」

「無理だな」警官は冷淡に答えた。「馬車に

でも乗らない限り」

彼女はポケットを探った。1ペニーもなかった。着替える時、財布を置き忘れてきたのだった。しかし、いずれにしても財布には硬貨が2, 3枚しか入っていなかったことを思い出した。

「距離はどれくらいですか」

「まあ約3マイルだな」と呑気な答え。25分で3マイル。ひとことも喋らず、一瞥も与えず、ヘスターはあらん限りのスピードでダッシュした。

フィンズベリー・スクエアに着く手前で、首の襟巻きを引き抜き、ジャケットのボタンを外し、襟巻きを腰にゆるく巻いた。バンクとマンション・ハウスの間の広場に出た時、時計の針は5時31分を指していた。ここストランドからウォータールー橋に至るまでの道は直線だった。しかし自制心の必要があった。動揺のため彼女の心臓は激しく鼓動していた。息は苦しく喘いでいた。脇腹に「差し込み」が来れば一巻の終わりだった。

それ故、ポルトリー、チープサイドと彼女は抑えて、しかし速いピッチで、両手で脇腹を押し付けて走った。舗道に響く蹄の音で、彼女は乗せてもらえるかもしれないと思った。しかしそれは小包郵便車に過ぎず、御者は燃え盛るランプの上高いところに座っていた。あつと言う間に彼女は追い抜かれた。高い、物音ひとつしない家、閉まった店の間を彼女は駆け抜けて行った。ひとり、ふたりの通行人が彼女を見、彼女が走り過ぎて行く時、不思議そうに振り返った。

チープサイドからセント・ポールの教会広場を横切るところで、ケープを着て、手提げランプをベルトに付けた警官に鋭く制止された。

「何事だ。今頃どこへ行くんだ」

ヘスターは走り過ぎようとしたが、重い手に捕らえられた。警官は説明を求めた。彼女は始終その手を振り払おうとしながら、泣きながら言った。

「ウォータールーを……朝1番の汽車で……人が行っちゃうんです……」

警官は、血の気が失せ、汗がしたたり落ちていた彼女の顔をジロジロ見た。

「行かせてください。どうかお願いします。行かせてください」

2, 3分ロスしたが、また自由になった。まるで風の魂のごとく、風が北東から激しく彼女に吹き付けていたが、大聖堂に沿って駆け抜けると、目の前にラドゲイト・ヒルの街灯が下って続いているのが見えた。下り坂とは、なんと嬉しいことか。息は、警官に制止されたがためにずっと楽になっていたが、今度は恐怖による心臓の鼓動のため再び乱れてきた。ラドゲイト・サーカスのところで、ブラック・フライアーズの方から西へ曲がってコベント・ガーデンに向かう商品配達用の馬車に出くわした。

「乗せていただけませんか」彼女は御者に向かって叫んだ。

軽率だったかもしれない。走った方が速かったかもしれない。しかしフリート・ストリートは目の前にそびえる山のように見えた。男はゆっくりと馬を止め、無駄話を始めた。ヘスターは彼のわきの座席に飛び乗り、彼をせかした。

突然、街は忙しく活気を帯びてきた。彼女は新聞の仕事のことを何も知らなかった。建物が電気のライトでパッと光り、彼女はびつくりした。馬車が舗道に横列をなして、長く縦列に並び、荷車には荷物が積み込まれ、人々は1分が生死を分かつかのように一彼女にとってはまさにそうであったが一忙しく働き始めた。もし汽車に乗り遅れたら、もしジョン・レイナーが未知の国に連れ去られたら、生きる希望は何も無くなってしまう。

「もっと速く走ってくださらない」彼女は声を上げて言った。

男はあれやこれやと質問してきた。お喋りだった。その時彼女の目の前の大時計、それは裁判所だったが、あたかも運命の手であるかのように5時40分を指していた。ああ、やつと息が戻ったので前よりも速く走れそうだが。礼のひとつとも言わず飛び下り、両手両膝を激しく打ちつけたが、起き上がって駆け出した。両手に濡れたものを感じた。街灯で血と分かった。しかし怪我による痛みはなかった。馬車が彼女に追いついた。心臓が破裂しても抜かれて

なるものか。

セント・クレメンズ・デーンズ……ストランド。人々が道掃除をしており、ホースから吐き出される水で水浸しだった。ここは別の大きなビジネス街で、荷物が投げられ、人々は騒々しく働き、待機している馬車もあれば走っている馬車もあった。彼女はそのわきを矢のように通り過ぎ、走って、走って、走った。

サマーセット・ハウス……ウェリントン・ストリート……ウォータールー橋の明かり。

再び警官が睨みつけ、行く手を遮ろうとした。彼女は金切り声で怒鳴った。「汽車なの。汽車なの」彼はそれ以上追及しなかった。川から激しい風が彼女に吹き付け、息を止めた。もし彼女が東に目をやったら、黒色のセント・ポール大聖堂が赤みを差し始めてきた空に映えているのが見えただろう。この日、日の出は6時過ぎという予報だった。夜が明け始めていた。

多くの労働者が橋を渡っていた。馬車が両側を音を立てて走っていた。胸は鉄で締め付けられているかのようにであった。喉は渇き切っていた。こめかみがピクピク動き、苦悶を表していた。もっと速く……しかし無理だった、精一杯のスピードだった。人々は彼女を見て、何人かは叫んだ。やっとなんか見えてきた。橋を下りた。駅員が彼女の目の前を急いでいた。彼女に追いつかれ振り向いた。

「汽車は……どちらから出ますか」彼女は喘ぎながら尋ねた。

「5時50分だな。大丈夫、間に合うよ」

彼は本線ホームへの行き方を教えた。ヘスターは走った。

急な上り坂を郵便車と競走した。馬の蹄から火花が散るのが見えた。後ろから新聞運搬車が、耳をつんざくばかりの騒音を立ててやって来た。

時計……目の前の時計は……。汽車の出発時間を1分過ぎていた。その時計は5分進んでいることを彼女は知っていた。恐怖と苦悶で走り続けた。外側のプラットホームには新聞の山が積み重ねられており、遅れた汽車を待ちながら束が後部に投げられていた。一群のポーター

たちが運搬車から荷物を下ろして、トロッコを押し回っていた。ベルの音が聞こえて来た。長い列車で、エンジン車両が見えなかった。ドアを開けて待っていた。急いでいる乗客はいなかった。混乱もなかった。トロッコの荷物は素早く貨車に詰め込まれた。彼女は間に合ったのだ。めまいがした。手足はガクガクだった。

その時、誰かが触った。彼女は振り向いた。ジョン・レイナーだった。買ったばかりのきめの荒いコートを着ていた。旅行帽をかぶり、手には頑丈なステッキを持っているだけで、驚きのあまり、目をまるまるさせて彼女を見た。

「おまえ、一体ここで何してるんだ」

「来たのよ……ずっと走って来たのよ……」

彼女の喘ぎ喘ぎの言葉はやっと聞き取れた。

「俺を見送りに来たのか」

ヘスターはステッキを持っている彼の手を掴んだ。

「行かないで……あなたが必要なの……結婚してちょうだい」

「ほほう。じゃあ俺について来い。俺はこの国を見限った」

彼は手は引つ込めたが、目は彼女に釘付けだった。

「行くって、南アフリカへ」

「切符を買う時間が1分ある。金はあまりないが、おまえの旅費を払っても向こうに着いたら1、2ポンド余るだけの金はある。決断しろ。1分だ……もう1分もない」

彼女は話そうとしたが、声が出なかった。ジョンは彼女のもとから切符売り場へ駆け出し、彼女の切符を持って帰って来た。

「一緒に来い。俺の荷物はここだ」

彼は彼女の腕を掴み、引っ張って行った。彼女は客車のステップを上がることができなかった。彼が彼女を上らせ、席に着かせた。

「でもわたし、着るものがないのよ……何ひとつないのよ」

「俺がいくつか買ってやる。サザンプトンで、船が出る前に2、3時間ある。何てひどい格好なんだ、ヘティ」

車掌が切符の点検に来た。彼はふたりを好奇

の目で見、それからふたりだけにした。再びベルが鳴った。

「ヘティ」

彼女はほとんど気を失いかけていた。ジョンは腕を彼女に回し、額、頬、そして唇にキスをした。

「わたし、ずっと走って来たのよ……」

気づかないうちに列車は動き出していた。ヘスターはヴォックスホールを過ぎるまで列車

が出発したことに気づかなかった。

そして彼らの背後では、東の空の赤い切れ目から夜が明け始めていた。

(使用テキスト: "Fleet-Footed Hester,"
Pierre Coustillas ed., *George Gissing: The Day
of Silence and Other Stories*, (London: Dent,
1993, pp. 25-37)